

氏 名	かわ 村 きよ し 志
学位(専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学位記番号	人 博 第 188 号
学位授与の日付	平成 15 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻
学位論文題目	近代日本における故郷表象の動態と文化概念の節合 ——石川県鳳至郡門前町七浦地区1915～2000——
論文調査委員	(主 査) 教授 菅 原 和 孝 教授 福 井 勝 義 助教授 田 中 雅 一 教授 松 田 素 二 教授 関 一 敏(九州大学大学院人間環境学府)

論 文 内 容 の 要 旨

本申請論文は、日本近代における「故郷」の表象と実践との相互的な構築過程について論じている。同時に今日の地域社会において、故郷表象として「文化」が前景化される歴史的過程とその重層的な位置づけを検証している。ここでは、石川県鳳至郡門前町の七浦(しつら)地区を対象としながら、当該地域における近代以後の歴史的な文脈を踏まえることで、地域の人々自身が行ってきた「故郷」という領域の実体化のプロセスとその現状を検討対象にしている。

まず、本論は大きく3部に分かれる。第1部に当たる第2章と第3章では、七浦地区の人々自身が編纂した小学校の同窓会誌を分析対象とする。そこでは大正期から現代に至るまでの地元に住む人々と出郷した人々との相互的な交渉によって、故郷観が展開してきたことが明らかになる。また、高度経済成長期を経て、1970年代以後になると、「文化」を巡る言説が故郷表象の中心を占めるようになり、その具体的な対象としての祭りや民謡が喚起されていくことになる。

次に第2部の第4章と第5章では、マス・メディアによる七浦の「文化」の表象とマルチメディアとしてのインターネットによる自己表象を検証対象としていく。そのうえで、これらのメディアと印刷メディアである同窓会誌における「文化」の表象との差異と相同性について検証していく。ここからは、インターネットによる自己表象が、マス・メディアが発信する定型的な故郷表象をずらし、相対化していると同時に、地域社会の共同性や家族の紐帯がそこで再び喚起されている点に留意する。

残りの第3章では、七浦の「故郷」と「文化」を巡る現状について分析を加えるために、フィールドワークに基づいた資料を中心に検証していく。まず、第6章では戦後になって大きな展開を遂げた「能登麦屋節」とその民謡を中心としてイベントの推移を紹介していく。この「能登麦屋節」は、戦前のある時期より、地元の有識者に見出され、その輪郭を整えていったものであり、それ以前の村落単位で行われていた盆踊りや祭りとは異質な存在である。この民謡の構築過程は、地域社会が近代以降の社会変動のなかで自らの同一性を探る試みとして捉えることができる。

逆に第7章では、七浦地区で一番大きな村落、皆月で継承されてきた「山王祭」に焦点をあてる。山王祭は、参加資格や資金の運営において、規範的な村落の祭りとしての機能を持ち、そのような制度的布置によって他者を差異化し、固定的な位置づけを成員に付与しているかにみえる。だが、実際には人々は、それらの制度や慣習に従いながら、祭りのなかに様々な形で自らの立場を見出し、自らの視点を中心の一つとして祭りを物語り、また振舞う作法を心得ている。そのような語りと実践の作法は、皆月を出て都会に暮らしながら、祭りには戻ってくる人々にとっても例外ではない。彼らの言説と祭りへの参与は、それ自体が「故郷」についての実践であると考えられることもできる。

最後の第8章では、人々の日常的な生活世界を構成する単位であり、また、故郷表象やインターネットなどでも人々自身によって主題化されていた「家族」や「家」の問題を検討していく。章の前半部は、日本の家研究や親族研究に準じた形式のもとに七浦における親族語彙や親族構成の特質について考察している。また、そのような家のソフトな側面として、個別

のイエに伝わる先祖の記憶や事跡が、イエの連続性についての言説を更新し、再構造化を促している事例を紹介していく。一方、後半では、慣習的なイエのイディオムから拒絶された人々がそれぞれの立場から「伝統」との節合を試みるなかで、彼らが生活規範とするものと、地域社会との実際の関係性のなかで生じる齟齬や軋轢、妥協と交渉の過程について検証している。

以上の議論から、本論文においては、「故郷」についての動態は、戦前から戦後にかけて、出郷者と地元との対立軸をもとに大きく変動してきたことがわかる。とりわけ、戦後の同窓会誌においては、故郷についての記述そのものが増加し、その位置づけが多層化してきた。故郷を想起するレパトリーは多様化し、個別化し、個々人が多面的な立場から発言する状況を迎えることになった。そこでは、故郷を語る行為そのものを客体化する言説が登場することになり、故郷表象は再帰的なものとして、人々に操作されるとともに、状況に応じて新たに位置づけられ、価値づけられる複数の拠点をもつものとなる。

一方、戦後から現代にかけて、「文化」という範疇とその具体的な対象である民謡や祭りは、人々の故郷表象の中核をなすとともに地域社会の同一性を表明するものとして構築されてきた。ただし、これらの「文化」は言説として操作され、交渉される一方で、実践の場においてはそのような言説空間とは乖離した価値観や社会関係を生み出してきた。

しかし、参与観察によって提示された事例は、人々が「文化」として価値づけられ、構築される領域の一方で、彼らが明示的には示さない慣習的な実践や規範があり、人々はそれらを参照系としながら、自らの生活を更新していることが明らかになった。生活世界における明示化されない人々の営みと意識化された「文化」とのせめぎあいと交渉の場として、故郷表象は現代日本における地域社会の現状を照射するものであることが、ここに提示されている。

論文審査の結果の要旨

本申請論文は、能登半島の漁村での村落調査と歴史資料の読解をもとに、主として故郷についての表象とそれをめぐるさまざまな実践との相互関係について、歴史的な文脈において考察している。そして、同窓会誌やマス・メディア、さらにはインターネットなども研究の視野に含むことで、日本の村落研究についてあらたな方向を示した意欲的な論文である。本論文は大きく三つに分かれる。詳しくは要旨を参照することにして、ここでは重要と思われる箇所をまず指摘しておきたい。序論に続く第2章と第3章が、調査地における小学校同窓会誌の検討である。会誌の執筆者は、卒業後も村に残った同窓生と、村を離れ、いわば外から村を見ることになった同窓生に大きく分かれる。なかには一度村を出て戻ってきた村人もいる。申請者は、同窓会誌に収められている記事のテーマや、故郷概念の変遷などを、丹念に読み解いていく。

ここで強調しておきたい点は3点ある。ひとつは、同窓会誌を100年近くの長期間にわたって分析した研究は皆無であるということである。つぎに注目したいのは、第二次世界大戦直前に、故郷のイメージが画一化され、直接国家に結びつけられているという指摘である。そこでは、戦争に突入する直前、地域共同体が解体・抹消されて、「想像の共同体」としての国家の出現が、いわば解体される側の共同体から明らかにされている。さらに戦後復刊した会誌では、民謡や村祭りが、故郷の象徴として繰り返し記載されている。申請者は、戦後、村人たちが故郷を語るに際して、祭りなどの村の伝統を自覚して表象するようになったと指摘する。伝統あるいは文化の創出についてはすでに多くの研究があるが、ここで申請者が問題にしているのは、伝統をめぐる意識自体の創出である。この点においても申請者の着眼点とオリジナリティを高く評価したい。

つぎの第4章と第5章はメディアにおける故郷表象が対象となる。しかし、ここで申請者はテレビ番組やインターネットでの表象を問題にするだけでなく、番組制作の過程やホームページ作りをも視野に入れることで、いかにして故郷表象が生みだされるのか、そこでなにが強調され、なにが捨象されてしまうのかを丹念に論じている。テレビ番組では、型通りの故郷像が先行するのにたいし、村人がつくるホームページでは、そのような故郷像を攪乱する写真や記述が散見される。ここでの意義は、たんなるマス・メディア批判に終わるのではなく、オルタナティブなメディアの可能性としてインターネットに注目し、その意味を分析していることである。

第6章から第8章までは、フィールドワークと文献研究を結びつける形で民謡と村祭り、そして親族関係を分析している。ここでは、民俗学の伝統的な対象がきわめて斬新かつ首尾一貫した形で取りあげられている。その斬新さは、歴史的な文脈の

なかで民謡や祭りを考察して、本質主義を批判するというだけでなく、村人たちにとって、そして個々の村人たちにとって、これらの伝統がいかなる意味をもち、いかなる形で継承されているのかを微細に論じていることである。

フィールドワークを重視する、と言いながら、民俗学の多くは村の長老やエリートからの聞き取りをもって一般化することを主たる調査ととらえ、具体的な事例の観察は副次的なものであった。さらに、最近の歴史への関心から、民俗学者はますますフィールドから遠ざかる傾向にある。この点で、歴史と観察によるフィールドワークの成果をまとめようとした第3部は、本論文の中核を占め、また、民俗学にたいしてもっとも重要な貢献をなすものと位置づけることができる。

全体の評価に移りたい。高く評価すべき点は、論文としての完成度の高さである。文化人類学の論文ではなによりも、一年以上の長期滞在による民族誌資料の収集という方法とそれによる成果が問われなければならない。だが、日本を対象とする民俗学の伝統においてフィールドワークは重視されてきたが、それは必ずしも長期滞在を条件としなかった。この点で、本論文は、民俗学流のフィールドワークへの批判にもなっている。そして、この論文に含まれているさまざまな事実についての知見と微細な変化をとらえるまなざしは、今後の日本研究というまでもなく、日本以外の人類学の分野においても大きな影響を与えるものになることは間違いない。

つぎに特筆すべき点は、歴史についての深い理解である。能登半島の一漁村の故郷表象とその実践を歴史的な文脈においてとらえることで、われわれが当然だと思っていた故郷像、たとえば祭りや民謡こそが故郷を代表する文化であるといった言説が、歴史的な産物であることを本論文は明らかにした。

最後に問題点を二つあげておく。ひとつは、歴史的な文脈の意義を強調しているにもかかわらず、本論文で考慮されているのは地域の歴史、それもかなり限定されたものである、ということである。その結果、地域の歴史と、より広域の一国家の、と言っても良いかもしれない—歴史との関係が十分に考慮されていないという難点がある。

もうひとつは、いくつかの学術用語や理論的立場について、その由来や歴史について十分な考慮をしていないのではないかという指摘である。これは理論的な領域に関係する。たしかに、本論文が言及している文化資源や再帰的あるいは創発性という概念についてはもうすこし丁寧な議論が必要であったかもしれない。

しかし、以上のような問題を含みながらも、申請者が目指した先行研究への批判とそれを乗り越える方途を示そうとした申請者の野心的な企ては、資料をめぐる考察の独創性とあわせて、十分に成功しており、博士論文としてきわめて高い水準を達成したことを、審査委員全員が一致して判断した。

また本学位申請論文は、文化人類学研究を目指して創設された文化・地域環境学専攻文化人類学講座にふさわしい内容を備えたものと言える。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成14年7月5日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。